

こせとしじこ
古瀬戸四耳壺 そうさく かねばいせき
惣作・鐘場遺跡

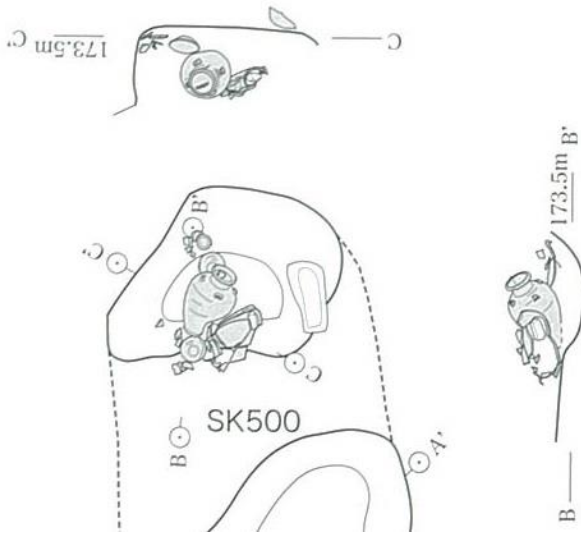
展示している「古瀬戸四耳壺」は愛知県瀬戸市赤津地区の惣作・鐘場（そうさく・かねば）遺跡で見つかりました。中世集落跡の土坑（穴）から、ほぼ完全な形で出土しています。（写真1・2）この土坑からは、他にもう一点の古瀬戸四耳壺と山茶碗*注などが出土しており、時代は13世紀代だと考えられています。



写真2 展示の古瀬戸四耳壺（文献1より）



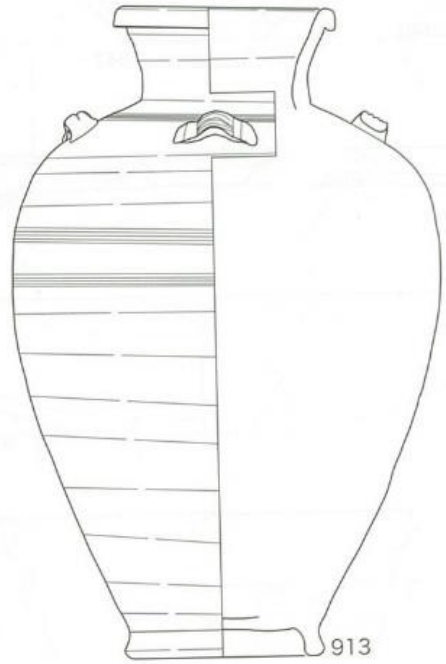
写真1 発掘された時の様子 中央が展示している四耳壺（文献1より）



遺構図(写真1の測量図 04Cb区SK500(文献1より))

「古瀬戸」とは、平安時代末から室町時代中期に現在の愛知県瀬戸市周辺の窯（かま）で焼かれた製品で、日本の中世陶器の中で唯一釉薬（ゆうやく＝うわぐすり）が施されています。

*注 釉薬をかけない日用雑器の碗



実測図（文献1より）

この「古瀬戸四耳壺」は、「灰釉（かいゆう）」と呼ばれる草木の灰を原料とした釉が施されており（施釉陶器）、「灰釉四耳壺」とも呼ばれています。肩の部分についている「耳」（取っ手）が4つあるので四耳壺といえます。（耳が2つならば双耳壺、3つならば三耳壺）

よく見ると、肩の部分と胴の部分に何本かの線が入っています。（実測図参照）

用途としては、酒などの液体を入れたと考えられますが(下図参照)、蔵骨器(そうこつき=骨壺)としての使用例も多く見られます。ここに展示しているものは、出土時に骨などは入っておらず、蔵骨器ではないようです。

時代が下って古瀬戸の中期以降(13世紀末の鉄釉出現以降)になると、このように肩の部分に耳のついた壺は茶壺としての需要が高まっていきます。 **四耳壺か**

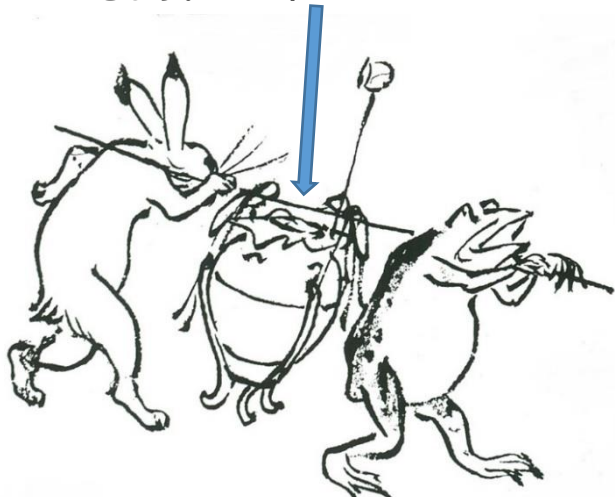
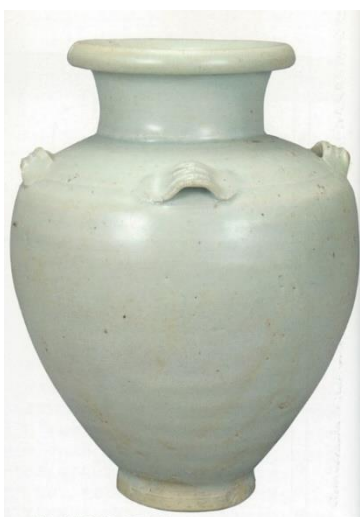


図 鳥獣人物戯画 甲巻(平安末から鎌倉初めか)

「古瀬戸」は中世の日本で唯一の施釉陶器でしたが、平安時代の末頃から庶民の間でも陶器の需要が高まり、釉薬をかけない山茶碗などの器が量産されるようになっていました。では、どうして瀬戸周辺地域で施釉陶器が焼かれるようになったのでしょうか。諸説ありますが、当時は貴族や寺社、また鎌倉幕府を開いた新興の武士、富農層たちは中国からの高価な輸入磁器(じき)を欲しがりました。これらの需要を満たすため、この地域では



中国 宋代の白磁四耳壺

白磁(はくじ)などの磁器の模倣に取り組んだのです。模倣のための方法として、釉薬の工夫があったといえるでしょう。というのも、この頃の日本ではまだ磁器を焼くことができなかつたからです。日本で磁器が焼かれるようになるのは近世の初めになっ

てからで、1610年代に有田で焼かれたのが初めてといわれています。(初期伊万里)

また、古代において、この地域を含めた猿投窯(さなげよう)では、灰釉陶器などの施釉陶器を焼いており、高級品として都にも運ばれていました。そういった釉薬に関する技術を古くから持っていたことも理由の一つだと思われます。



塔の越遺跡出土
灰釉手付瓶(てつきへい)
平安時代(文献2より)

ところで、「陶器」と「磁器」の違いは何でしょう。色々挙げられますが、まず原料が違います。

「陶器」は陶土とよばれる粘土が主であり、「磁器」は陶石とよばれる岩石が主になっています。長石などの石の含有量と焼成温度の違いで、固く、質が緻密となり、ガラス化が進んだものが「磁器」です。釉(うわぐすり)はガラス質となるので、前述の“磁器の模倣”のために釉薬の工夫が重ねられたこともうなづけます。

さて、「陶器」と「磁器」、どうしたら簡単に見分けられるでしょうか。

光にかざしてみてください。陶器は光を通しません。磁器は少し透けて見えます。もっと簡単な方法は、たたいた時の音を聞くことです。陶器は低く鈍い音がし、磁器は高く澄んだ金属音がします。一度試してみてください。

参考文献

- 1 愛知県埋蔵文化財センター 調査報告書第150集 惣作・鐘場遺跡Ⅱ(2008年)
- 2 愛知県埋蔵文化財センター 調査報告書第171集 長野北浦遺跡 塔の越遺跡(2012年)